

第1回乳用牛ベストパフォーマンス実現会議における主な意見

日時 平成26年10月31日(金)13:30~16:30

場所 農林水産省共用第7,8会議室

1 頭数の維持・拡大について

(1) 乳用後継牛の確保

- ・ 後継牛の確保のためには、性判別精液が有効。しかし、普通精液に比べ受胎率が低いことから、受胎率向上のための改善に取り組んでいる。
- ・ 農家の生乳生産の増産意欲を惹起するためには、性判別精液を活用した効率的な優良後継牛生産と空いた腹を用いた和子牛生産を計画的に行うことが有効。
- ・ 将来の不安から、育成牛を持ち過ぎ、運転資金の不足に陥っている経営も散見される。儲かっている経営は育成牛の割合を小さくしつつ、初妊牛導入を最小限にしている。
- ・ 後継牛を残したい雌牛には、まず、性判別精液を使い、止まらないときはET、それでもだめなら交雑種を種付。とにかく受胎させることが重要。
- ・ 乾乳期の栄養摂取が十分でなく、栄養不足に陥っているため、分娩後の搾乳牛の事故が増加しているとみられる。

(2) 経産牛の供用期間の延長(周産期病の予防)

- ・ 経産牛の供用期間の延長のためには、検定成績から得られる個体情報を活用した飼養管理が有用。このためには、検定成績を経営改善に活用できるように、分かり易い情報提供に努めていくことが重要。
- ・ 乳房炎の予防に向け、ミルクカーの点検を奨励したものの、点検方法がマチマチであったり、点検のみで改善につながらなかったりと、思惑通りには進まないことを痛感。
- ・ 検定成績から得られる個体管理を行ってきたことから、周産期病を起こしたこともなく、繁殖も悪化していない。

(3) 経産牛の供用期間の延長(栄養管理)

- ・ 高泌乳牛ほど繁殖性が悪いと言われているが、これは、泌乳開始直後の乳量の伸びに併せた食込が追いつかず、負のエネルギーギャップが続き、発情兆候が微弱化しているためとみられるところ。このため、乾乳期の適切な栄養管理の励行を普及・啓発していくことが重要。
- ・ 濃厚飼料の多給が乳量に結びついていないのは、
(ア) 一群管理とTMRの普及により、個体ごとの乳量に見合った量の飼料給与ができていないためとみられる。
(イ) また、乾物ベースでは十分な粗飼料給与量を飼料設計しているものの、粗飼料の品質が想定を下回っているためとみられ、これが、ルーメン内の異常発酵からアシドーシスを引き起こす原因となっているとみられる。

2 1頭当たり乳量の増加について

(1) 暑熱対策の徹底

- ・ 暑熱対策は、ストレスの指標である温度・湿度を確認した上での励行が重要。
- ・ 真夏日が増える中、暑熱対策が重要。

(2) 繁殖成績の向上(農家自ら行う発情発見)

- ・ 繁殖性の改善は、AM/PM法を用いるなどの適期授精の励行が重要。
- ・ 無発情牛等の発見は、繁殖台帳や検定成績等の記録を基に行われるべき。問題が起きた後の対応だけでなく、発生に先んじた予防も重要。
- ・ 平均分娩間隔は437日となっているが、その分布をみると、1年1産の個体も多く存在。検定成績により、牛群平均から大きく離れた個体を、容易に見つけることが可能。
- ・ 個体ごとの分娩後の空胎日数を管理し、45日を過ぎても、発情が確認できない個体には、発情の同期化を行うなどの基本を励行していれば、繁殖管理に困ることはない。

(3) 繁殖成績の向上(獣医師等が行う処置)

- ・ 受胎し難い個体には受精卵移植を行うこともあるが、このような個体の分娩間隔は、420日程度になるため、発情の観察だけでなく、発情しない個体の処置も重要。
- ・ 飼養頭数が増えると個体の観察が疎かになるため、削蹄、繁殖などの独力での改善が困難な管理は専門家と相談しながら、経営全体の改善に取り組むことが重要。
- ・ 「AI師と酪農家が繁殖について語り合うことがきっかけとなり、酪農家が繁殖管理に意識を向けるようになった」という事例発表を聞いた。獣医師やAI師に繁殖管理を任せっきりにしていた酪農家に対して、専門家が助言することにより、良い意識付けができたという話。
- ・ 酪農家は発情発見の重要性については理解しているが、それが励行されていないのは、規模拡大による労働力不足のため、繁殖管理が後回しにされているとみられる。

(4) 飼料給与の改善

- ・ 濃厚飼料の代替となるものは、北海道、都府県ともコーンサイレージとなるが、水田地域では稲WCSの活用も有効。
- ・ 関東における酪農家の耕地は、これまでは、排せつ物処理のためとみられるような土地もあったが、近年、輸入乾草の価格が上がり、自給飼料生産への関心が向上。
- ・ 乳飼比はマクロでは悪化しており、25年度は前年度比+3%の57.7%が平均値。しかし、約4割は改善していることから、お自給飼料の活用と飼養管理によって、儲けるチャンスも存在。個別にみると、自給飼料生産がゼロでも稲WCSやエコフィードを活用している経営や、繁殖成績が良い経営において、改善している例もみられる。
- ・ TMRに追加給餌を行うことで、その良さをダメにしている例もみられる。

- ・ 自給飼料生産の拡大のためには、北海道では、草地の半分が裸地化や雑草化していると言われており、草地更新や植生改善が重要。都府県では、夏はコーンサイレージ、冬はイタリアンサイレージ or 稲WCSの通年サイレージ給与体系を確立が重要。そのためにはコントラクターに飼料に関するコンサル機能も付加することが重要。

(5) 遺伝的能力の向上

- ・ 1頭当たり乳量を増加させるためには、
 - (ア)ピーク時乳量を高める分娩直後の飛び出し乳量を多くするのではなく、ピーク時乳量を持続させる泌乳持続性を高めることが有効。
 - (イ)そのためには、泌乳持続性の高い国産種雄牛の活用が有効。
- ・ 改良は、種雄牛だけではなく、酪農家が飼養する雌牛側からの取組も大事であり、泌乳持続性を高めることが重要。また、1頭当たり乳量の向上はもう充分という声も聞こえるが、1頭当たり乳量の向上を伴わない改良は、経営にはプラスに作用しないとみられる。

3 その他

(1) 農家自らが行う経営改善

- ・ 良い経営と悪い経営の差が開いてきていると感じることから、検定成績を活用した経営改善が重要。これまで検定成績から得られる個体成績を基にした管理を行ってきたが、周産期病を起こしたこともなく、繁殖性の悪化もみられないところ。
- ・ 牛群検定に参加しない酪農家は、個体データが無いため、経営改善を図る方向も分からないはずなので地域で加入を勧めているところ。

(2) 地域における農家指導

- ・ 牛群全体の1頭当たり乳量が高いのは、その経営の技術力の証。北海道では、数戸の経営が集団となって、経営者それぞれが繁殖管理、飼料調製、衛生管理に専門別に特化して、集団全体の経営が底上げされた例もみられる。
- ・ 牛群検定に参加していても、検定成績を解説できる地域における指導者や専門家が減少していること、また、新たな情報が加わっても検定成績を咀嚼できないことから、宝の持ち腐れになっている例もみられる。
- ・ 地域の指導者や専門家は、生産現場において、本会議で議論している事項が課題となっていることを知らないように感じる。まずは、課題を周知することが改善につながっていくとみられる。
- ・ 個々の酪農家が独力で経営全体の改善に取り組むことは困難であるため、酪農家を包み込むような検定組合、農協、大学等とのコラボレーションによる地域の支援体制が重要。